

科目名	Linux実習2								年度	2025
英語科目名	Linux System Practice 2								学期	後期
学科・学年	ネットワークセキュリティ科	1 年次	必／選	必	時間数	30	単位数	1	種別※	実習
担当教員	塚本		教員の実務経験		有	実務経験の職種		システムエンジニア		
【科目の目的】										
「Linux実習1」と「Linux実習2」を履修することで、ネットワーク利用で各種サービスを提供するサーバーで利用されることが多いOS（オペレーティングシステム）であるLinuxの特徴や利点を知り、実際にLinuxを使うための環境構築および運用方法について理解し、具体的なコマンド操作ができる技術力の習得を目指します。また、授業では1つのディストリビューションを使用しますが、それ以外のディストリビューションとの違いについても学びます。										
【科目の概要】										
LinuxOSの管理やシェルスクリプトなどを学びます。 ※下記記載内容は、「Linux実習1」「Linux実習2」両科目に対応する内容に										
【到達目標】										
A. Linuxのインストールと利用環境の構築ができる B. 一般利用者としてのコマンド操作ができる C. 管理者としてのコマンド操作ができる D. 高度なコマンド操作ができる E. シェルスクリプトの作成とその活用ができる										
【授業の注意点】										
実機を操作することで身につける必要があるため、積極的に実習に取り組む姿勢を重視する。また、規律ある授業を行うため、授業中の私語や受講態度などには厳しく対応する。当然であるが、理由のない遅刻や欠席は認めない。また、ノートパソコンは必携であり、授業時数の4分の3以上出席しない者は定期試験を受験することができない。										
評価基準＝ループリック										
ループリック 評価	レベル5 優れている	レベル4 よい	レベル3 ふつう	レベル2 あと少し	レベル1 要努力					
到達目標 A	さらに発展的なLinuxのインストールと利用環境の構築ができる	与えられた仕様をもとにLinuxのインストールと利用環境の構築ができる	Linuxのインストールと利用環境の構築ができる	Linuxのインストールと利用環境の構築時に発生するエラーの対応ができない	Linuxのインストールと利用環境の構築ができない					
到達目標 B	さらに発展的な一般利用者としてのコマンド操作ができる	与えられた仕様をもとに一般利用者としてのコマンド操作ができる	一般利用者としてのコマンド操作ができる	一般利用者としてのコマンド操作時に発生するエラーの対応ができない	一般利用者としてのコマンド操作ができない					
到達目標 C	さらに発展的な管理者としてのコマンド操作ができる	与えられた仕様をもとに管理者としてのコマンド操作ができる	管理者としてのコマンド操作ができる	管理者としてのコマンド操作時に発生するエラーの対応ができない	管理者としてのコマンド操作ができない					
到達目標 D	さらに発展的な高度なコマンド操作ができる	与えられた仕様をもとに高度なコマンド操作ができる	高度なコマンド操作ができる	高度なコマンド操作時に発生するエラーの対応ができない	高度なコマンド操作ができない					
到達目標 E	さらに発展的なシェルスクリプトの作成とその活用ができる	与えられた仕様をもとにシェルスクリプトの作成とその活用ができる	シェルスクリプトの作成とその活用ができる	シェルスクリプトの作成とその活用時に発生するエラーの対応ができない	シェルスクリプトの作成とその活用ができない					
【教科書】										
新しいLinuxの教科書（SBクリエイティブ）										
【参考資料】										
別途 講義資料を配布										
【成績の評価方法・評価基準】										
授業中に実施する演習への取り組み状況、および出席状況などを総合的に評価する。										
※種別は講義、実習、演習のいずれかを記入。										

